

皆さんこんにちは。よろしくお願いします。今ご紹介いただきましたように、昭和 59 年からこの善通寺市のほうで埋蔵文化財の担当として遺跡の発掘調査や遺跡の保存整備事業に携わってまいりました。実は 2 年前にもう退職しております、今は教育委員会のほうでこういった文化財や文化芸術関係のお手伝いをさせていただいております。30 年間ぐらいにわたる善通寺市での仕事のうえて、非常にユニークといえますが、貴重な遺跡や文化財に出会うことができました。やはり、弘法大師がお生まれになった土地柄というものもあるんですが、古代遺跡の調査をずっとして、素晴らしい遺物・遺跡が出てきて、そういったものの蓄積の中で弘法大師という方がこの地にお生まれになって、そしてそのあと、そういった歴史を基にこの町が今まで続いてきているというのをこの 30 年間のなかで実感しました。

今日の講演は、この地の歴史をたどりながら、皆さんにもお伝えできたらというふうに考えております。お配りしている資料はまたのちほどご覧になっていただいて、スクリーンのほうをずっとご覧いただけたらと思います。以前もここでお話させていただいたことがありまして、よく似た話で重複するかもしれませんが、また新しい史料もお持ちしておりますのでその辺も併せて見ていただけたらと思います。

(スクリーン：鷺羽山から望む瀬戸内海・島々・本土) まず人々の歴史を考えていくうえで、どの頃からこの辺り(善通寺市周辺)に人類がいて活動していたのかということ、まず最初にご説明させていただきたいと思います。この写真は、鷺羽山から善通寺市の方角を見たところです。これが五岳山、この辺りに見えています、善通寺市はこの辺りです。そして地球規模でいきますと、大体今から 200~300 万年前に人類が登場しています。ところがこの辺りへ人類が登場してくるのは、そのあと、大体今から 2 万年前から 3 万年前というふうに考えられています。このことは、今、写真に写っている島嶼部の山の上などから旧石器が見つかることによってわかっています。ただ、この石器を使っていた人たちが活動していた時期にこの場(鷺羽山)に立って同じ方向を見ると、全く風景が違います。別に大規模な火山活動とかがあったわけではなくて、海水の量が違うんです。今申しましたように、今から 2 万年前から 3 万年前というのは氷河期の終わり頃になります。氷河期というのは地球全体が寒冷化している関係で、普通、大気の中を循環して回っている水が全部陸地にとどまります。陸地に降るのが雪とか氷だけになって、それが全部溶けずに陸地にたまっていきますから、海の水がどんどん蒸発を続けて海面が今よりも低かった時代があります。一番大きな海面下降だと 100 メートルを超えたりしていますので、そうすると、今見ていただいた瀬戸内海などは陸地だった時代です。ですから、今でも地引き網なんかを引っ張っていますとナウマンゾウとかオオツノジカの化石が出てくるというのは、そういったことが原因です。島嶼部の山の上から石器が出てくるというのは、平原を見下ろす場所で狩りの準備をして、石器作りなどをして動物を待ち構えていた人たちがいた、その痕跡というふうに考えられています。

(スクリーン：善通寺市内出土の旧石器) 今見ていただいているこの旧石器、実はこれは善通寺市内の出土になります。高速道路の建設のときに、天霧山の裾野のほう、碑殿町で発見された旧石器になります。ですから 2 万年から 3 万年前、島嶼部の辺りだけではなくてこの内陸部の善通寺の辺りにも旧石器人が活動していたということがわかります。(スクリーン：2 万年前の中国大陸と日本列島の図) この絵を見ていただきますと、水色の部分が海になります。そして日本列島もこれ、ずっと上までつながってしまっています。青

い線が現在の海岸線、黒い線が氷河期の海岸線になります。見ていただくと、瀬戸内海は完全に陸地ですし、北のほうは北海道から樺太を通じて大陸までつながっています。当時こういったところを通して日本に入ってきた大型の動物を、追い求めて日本列島に入ってきたのが元のこの辺りの人類ではないかと。（スクリーン：飯野山から望む普通寺市）わかりやすくいきますと、これ、現在の飯野山のほうから普通寺市の辺りを見た写真になります。大麻山とか五岳山、天霧山が見えていますが、氷河期当時は実は瀬戸内海の中までこういう独立丘陵がたくさん並ぶ地形が続いているわけです。ですから、ちょっとこの写真を加工して下を平原にしてしまうと……、（スクリーン：氷河期の当地イメージ）当時の瀬戸内海もこういう雰囲気だったというふうに考えてください。そして、こういうところにオオツノジカとかナウマンゾウがいて、それを当時の人々が捕って食べていたと。ただ、氷河期の終わりを迎えると気温が今の状況に戻ってきますので、両極地の氷がまた溶け始めますから、海面上昇してきます。そして元通りの瀬戸内海ができてきます。（スクリーン：氷河期後の当地イメージ）そうして海面上昇していくと、これは普通寺市辺りの風景ですが、海を付け足してみますと、今の瀬戸内海を見ているような雰囲気になります。当時の環境がわかりやすいかなと思って、こういうイメージ写真を見ていただきました。

ただ、氷河期が実は4回きています。氷河期と氷期のあいだは間氷期と呼んでいますが、一番最後の氷河期が終わったあとも、実は間氷期と同じように気温が上昇しています。今よりも上昇している時代になります。なぜか氷河期の後というのは地球規模でまた気温が上がっている時代がきていて、最後の氷河期の後も、実は今の気温よりもちょっと気温が高くなっています。そうするとどういことが起きるかということ、最近、異常気象ということで高温になって、両極地の氷が溶けて海面上昇の問題が出ていますが、当時もそういった現象が起きていた時代です。縄文時代の中頃（約6000～4000年前）が一番高く、今よりも海面が5メートル程度高かったようで、内陸部まで海岸線がちょっと入り込んでいます。

（スクリーン：なつめの木貝塚）この写真は貝塚の写真です。普通寺市内には貝塚はありませんが、観音寺市のなつめの木貝塚っていうところの調査をお手伝いしたときの写真です。上の表土をはいでみますと、この白いものが全部貝殻です。（スクリーン：なつめの木貝塚の出土遺物）下に堆積土がありますが、こういった貝殻が土の中から出て、たくさんの縄文土器も出てまいります。また、縄文土器以外にも貝殻等の間から当時の人たちが捕って食べていた獣骨等が出てきます。これはイノシシの牙、イノシシの歯、シカの角、それから真ん中のこのあたりにあるのがスズキやタイなどの魚骨。こういったものを食べていたようです。このなつめの木貝塚は海岸から離れた、ちょっと内陸部の小高いところにあります。当時はその辺りまで海面が上昇していたということが考えられます。貝塚というのは海岸線付近に形成されていきますので、貝塚が山のちょっと小高いところにあるのはその近くまで当時は海が入り込んできていた、というふうに考えていただいたらいいと思います。ただ、縄文時代も終わりに近づきますと気温がだんだん下がって、ほとんど今と同じような気温になります。そうすると何が起きるかということ、やはり気温が下がってくる関係から両極地域で氷が多めに形成されていって、海面がまたちょっと下がります。そして、今とほとんど同じようになった頃から、日本では弥生時代が始まります。

（スクリーン：普通寺市の航空写真）普通寺市内では特にこの弥生時代以降の遺跡がたくさん知られていま

す。弥生時代は日本で稲作が始まった時代っていうことで知られていますが、これは今の善通寺市の航空写真になりまして、赤い破線で囲った部分、ちょっと古い写真ですので古い国立病院が写っていますが今ここは四国おとなとこどもの病院ですかね、またここには自動車学校もありますが今はテニスコートなどになっています。善通寺の伽藍は赤い破線の外側、ここに見えています。それで、この赤い破線で囲った部分なんですけど、こちらに弘田川、こちらに中谷川が流れていて、河川に囲まれた大きな楕円形の地形になっています。この辺りが実は、これまでの開発などに伴って弥生時代から古墳時代にかけての土器や石器が非常にたくさん出てくることから、巨大な、中枢的な集落遺跡だと知られています。名称はといいますと、善通寺市に陸軍第11師団が開設されたときにこの辺り一帯が練兵場として使われていましたので、「旧練兵場遺跡」という名前で知られています。実は考古学の世界では国内でもトップクラスのすごい遺跡であるということが認知されている遺跡になります。

こういったところで発掘調査をしますと、（スクリーン：旧練兵場遺跡の発掘調査風景1）この写真のように非常にたくさんの当時の人たちの生活の跡が出てきます。この大きなマルは竪穴住居（跡）です。小さなマルは柱を支えていたような穴、こういうものが出てきています。これがどういうことなのかというと、（スクリーン：吉野ヶ里遺跡）この写真を見ていただくと、これは吉野ヶ里遺跡の写真をお借りしていますが、一時期の風景を見ると（旧練兵場遺跡も）こんな感じです。集落があって広場があって、竪穴住居が離れて建っていて、倉庫やこういったやぐらが建っていたと思われます。ところが、何十年か経って家が古くなってくると、それを壊して近くにまた新たに家を建て直していきます。それを繰り返していく過程で地面にこのような何十年、何百年にもわたる生活の痕跡が残されていくわけです。つまり、こういった痕跡の密度が高いほど、長期間にわたる集落の遺跡であるということがわかります。

旧練兵場遺跡の辺りに多くの人たちが集まってきたのには、ほかにもいろんな理由があったと思われます。

（スクリーン：善通寺市の遠景）まず一つは、当時は稲作を始めた時代ではありますが、稲作をするためには水の供給がしやすい場所が必要になります。ただ、水の供給がしやすい場所というのは洪水などのときに危険な状態になりますから、人々が住むのは微高地、やや小高くなっていて洪水から身を守りやすい場所。善通寺市のこの辺りはそれらの条件を満たしていたようで、現在の市街地辺りにその集落遺跡が広がっていて、その周りに田園地帯が広がってきたと思われます。（スクリーン：五岳山と田園）またこの辺りは、集落遺跡の背後にある五岳山を含めて、非常に特徴のある、独特な形の山々が並んでいます。これが当時の人たちの信仰の対象にもなったようで、こういった山々からはたくさんの青銅器が出てまいります。（スクリーン：五岳山の出土遺物）稲作農耕にまつわる祭祀に使われたというふうに考えられていますが、これが我拝師山の銅鐸と陣山の銅剣になります。このほかにも非常にたくさんの青銅器が出てきていて、旧練兵場遺跡に住んでいた人たちが祭祀に使って山に埋めた道具だ、というふうに考えられています。青銅器はどこでも出てくるわけではないので、これだけの量がまとまって出るということはやはり、文化水準が相当高かった地域ではないかということが考えられています。

（スクリーン：様々な生活の痕跡）また、こういった祭祀の道具以外にも、竪穴住居の跡を掘ってみますと日常の痕跡がたくさん出てきます。これは例えば竪穴住居の中の壁ぎわに置かれていた小さな鉢ですが、われわれが食事が済んだときにお茶碗を重ねて入れるのと同じように重ねて、片すみに置いてあるような状態

でてきたり、竪穴住居の床面からはシカの角が、あとで何かに加工しようと思ったのかもしれませんが、置き忘れたままの状態でてきたり。驚くのは砥石です。これ。普通にそのへんに置いてあったら現代のものともいいような、すごく使い込まれた砥石なのですが、これが弥生時代の終わり頃の竪穴住居の中から出てきます。砥石が出てくる住居は石器が出てきません。通常、弥生時代っていうのはまだ石器を使っている時代なんですけれども、この辺りでは、弥生時代の終わり頃になると石器の使用も終わって、いち早く鉄器が一般の人たちの生活の中にも入ってきているようです。ですから一般の人たちの竪穴住居の中から砥石がたくさん出てきて、逆にサヌカイト（＝讃岐岩）製の石器が出てなくなります。普通、鉄製品が日本で普及してくるのは古墳時代と考えられますが、弥生時代には既にこの辺りでは一般の人々の生活の中にも鉄製品が定着しはじめていたということがわかります。かなりの先進地だった可能性があります。この辺りは、かなり人口密度が高いといえますか、（スクリーン：旧練兵場遺跡の発掘調査風景2）これはおとなとこどもの病院を整備するときに香川県が調査したときの写真ですが、ご覧のように足の踏み場もないほど全部、竪穴住居です。何十年、何百年にもわたって人々が住み続けてきた痕跡になります。極端に言えば、この写真の上の方にもたくさんわれわれの時代の家が写っていますが、今まで途切れることなく、大勢の人たちの生活の場が続いてきているというふうに考えられますから、これは全国的に見ても非常に珍しい場所になります。（スクリーン：旧練兵場遺跡の発掘調査風景3）例えば、下水工事をするために竪坑を道路の真ん中に掘ると、道路の真ん中でも、こういった生活の痕跡がたくさん出てきたりします。ここに竪穴住居とか、立て柱の建物跡が出てきています。

（スクリーン：旧練兵場遺跡の発掘調査風景1）これはさっきの写真になります。円いのが全部竪穴住居だと申しましたが、別なところを調査してみると、（スクリーン：旧練兵場遺跡の発掘調査風景4）ご覧のように四角い竪穴住居がたくさん出てきています。どういうことかと申しますと、円い竪穴住居、これは弥生時代の中頃の竪穴住居になります。またその上にちょっと写っている四角いんですけども隅が丸くなっているもの、これが弥生時代の終わり頃、さらにそこからこういった四角い竪穴住居へと変わっていきます。しかも、この四角い竪穴住居、大体みんな同じ四角で、特定の方向を向いていることがわかります。北面の中央部にみんなこれ、何か特殊な構造物がついていますね。これは何かといえますと、かまどです。（スクリーン：竪穴住居のかまど）この辺りの地域ですとどこでも、昔の農家の家を思い出していただくと、大抵一番北の端にかまどがあったと思います。かまどがこの位置につくというのはその地方の風向きとかいろんなことも影響すると思いますが、もう古墳時代の終わり頃、大体6世紀ぐらいからは北面の中央にかまどをつけるという風習ができていたようです。大抵北面にかまどがあつて、今でもこの辺りのお宅は北側に台所が多いんじゃないかと思います。

今見ていただいたように、旧練兵場遺跡は弥生時代に発展して古墳時代まで継続し、またさらに発展していきます。（スクリーン：有岡地区の遠景）この旧練兵場遺跡は今の善通寺市の市街地あたりが中枢的な集落遺跡ということなんですけども、逆に市街地から南西側にあります有岡地区と呼ばれる五岳山と大麻山に挟まれた地域、この地域一帯が実は一大古墳地帯となっています。恐らく、当時も生活域とは分けて、この辺りを聖域視していた可能性があります。住居跡が出てくることもあります極めて少なく、逆に、たくさんの墳墓が作られています。今わかっているだけでも400基近い数の古墳の存在が知られています。特にこの

谷部では、今お示ししました（7箇所ほど、主要な古墳の地点にしるしが入る）なかの「宮が尾古墳」以外は全部前方後円墳です。これらの古墳はこの辺りを治めていた歴代の首長墓というふうに考えられています。真ん中にあります王墓山古墳の発掘調査と、その評価、それから史跡指定という流れになって、この辺りの古墳群が史跡指定を受けたあと、それぞれの保存整備事業を行ってまいりました。一番最初に調査したのが王墓山なんですけれども、時代の古い順に今から見ていきますと、この野田院古墳が一番古い古墳になります。

（スクリーン：野田院古墳の側面全景）「3世紀後半（発生期）」と書きましたが、実はこれは古墳時代でも一番古い、日本国内で古墳が造られはじめた頃の古墳ということになります。しかも山の非常に高いところにあるだけではなくて、非常に特殊な古墳です。（スクリーン：野田院古墳の上面）ご覧のとおり、「積み石」で造られている古墳になります。通常古墳は盛り土をして、盛り土の中に石でできた部屋「石室」を造りますが、この野田院古墳は墳丘全体が積み石でできている「積石塚」と呼ばれるものです。この積石塚、実は日本中に分布していません。大きなグループとしては香川県を中心とする瀬戸内海沿岸部のグループ、それからもう一つが長野県・信州のほうのグループになるんです。日本にその二つのグループしかないんですが、その二つの間にも違いがありまして、瀬戸内海沿岸部のグループというのは3世紀の終わり頃から4世紀代の非常に古い時期の古墳になります。ところが信州のグループというのは6世紀の終わりから7世紀の初頭にかけての古墳時代の終わり頃のものになりますから、両方が同じ文化かどうかということ比べることはちょっと難しいです。

香川県に分布するこの積石塚というのは、古墳の発生を考えるうえで非常に重要性があると評価されていますが、そのうちの、この野田院古墳という古墳の発掘調査をしました。

発掘調査の目的は、「この古墳を元どおりの形に整備する」ということです。（スクリーン：野田院古墳の発掘調査風景1）樹木が茂って、その根によってかなり古墳が壊れてきていました。また、大勢の人たちが見学に登ったりして石が崩れていて、このまま放っておけば完全に崩壊してしまうだろうということで、この段階で調査をして、元どおりの形に復元・保存しようっていうことになりました。これは発掘調査を実施したときの写真ですが、ご覧のとおり中央に石室が二つ見えています。普通、石室を造る場所というのは古墳の真ん中で、そこに最初の被葬者が葬られます。複数出てくる場合もあるんですが、その場合は最初の石室の周りに新たに、家族が亡くなったときなんか新たに石室を設けて追葬していくことになります。ですが、この野田院古墳では最初から二人を埋葬する目的で、中心から均等にずらした位置に二つの石室が並んでいます。これは「二棺並葬」というんですけども、香川県では割と見られます。全国的には少ないもので、この積石塚の発生・起源を考えるうえで非常に大きなヒントになります。香川県では弥生時代の「積石墓」というものも平地で見つかっていて、そこから発展したという考え方もありますが、恐らくそうではなく、これは大陸から、恐らく高句麗からもたらされたものの可能性が高い。実は近い時期で、高句麗にも積み石の古墳があります。このように二棺並葬にもなっているので、そういったところから伝わってきたのではないかと考えられますが、詳しいことはまだわかっていません。

形を見ていきます。前方部がこういうふうに細長く、普通、仁徳天皇陵なんかで見られるような形のもので

はなくて、前方部の中央部がくびれた非常に細長い形をしています。これが一番古い時代の積石塚の形になります。それと、さっき申しましたように、弥生時代の積石墓が発展して積石塚になったのではないかということもいわれるんですが、実はこの野田院古墳の解体修理のときに非常に面白いことがわかりました。(スクリーン：野田院古墳の発掘調査風景2) これ、一番崩れていたところです。写真左側に向かって斜面が下がっています。わざわざ地面が傾斜しているところに墳丘を設けていて、そうしますと斜面の下に向かって崩れやすくなるんですが、これは解体しているときの写真です、ちょっと皆さんお気づきになるかどうか。全部これ、一番下の基底部まで、大きな石が斜めに置かれています。古墳の縁の石に向かって斜めに立てかけていくように連続して並べられています。これには非常に驚いたんですけども、ただ単に石を積んだだけではなくて、斜面の方向に崩れないように、石と石が滑りを起こしても外側ではなくて内側に滑るような力が働くようにして、非常に丈夫な石積み古墳を造ろうとしています。当時の人たちがこういうふうな土木技術の知識を持っていたということが、この調査で初めてわかりました。

(スクリーン：野田院古墳の復元工事風景1) また、そういった調査でわかったことを再現しながら、崩れているのを復元していきました。実際、発掘調査で転落している、ずれているような場所を全部確認しながら復元をしていっています。ですから全くオリジナルであった部分と、新しく復元した部分と、全く失われているので新たに積み直した部分の三つに分かれます。(スクリーン：野田院古墳の復元工事風景2) これは石室を復元しているところです。石室も同じような考え方で復元を行っています。(スクリーン：野田院古墳の復元後風景) そして復元が終わった状況がこういうかたちになります。ただこれも、実は完全に復元されている状態ではありません。本来は恐らく三段目があったと思われます。見ていただくと、この二段目を積んだ段階で石室の上部が見えていまして、この上に蓋石をしなくてははいけません。一部蓋石をした状態で復元してありますが、三段目がどの高さまで盛られていたのかというのははっきりわかりませんので、このような形での復元でとどめています。それから、崩れやすいこちらの下っている斜面ですが、もっと古墳を横にずらすと平地で造れるのに、わざわざ傾斜地にずらして造っています。これはよく考えてみると、傾斜地というのは下から見上げられる場所になります。古墳を傾斜地にずらすことで、こちらの下っている側の壁面が巨大になります。見上げたときに非常に大きく見えるようなかたちになる、恐らくそういったことを意識してわざと傾斜地にずらして造っているんだと考えられます。それから、写真を見ていただきますと古墳の下の方の段のところにつぼ型の土器が並んでいます。これは日常生活で使うものではなくて、魔よけのような意味を持ってここに並べられています。底に穴が開いています。これが実はのちに埴輪に変わっていきます。埴輪祭祀の一番古いかたち、姿をとどめています。

(スクリーン：磨臼山古墳の割竹型石棺) こども史跡指定を受けています。墳丘は整備されていませんが非常に貴重な石棺が出てきている古墳です。香川県ではたくさん優れた考古資料がありますが、考古資料の中で重要文化財の指定を受けているものはこれだけです。善通寺市の磨臼山古墳から出土しました「割竹型石棺」。偕行社が郷土館として使われていたとき、かなり長い間そこにこれが展示されていました。(スクリーン：割竹型石棺とその石枕) 見ていただくと、この身のほうの頭の部分に見事な石枕、枕のレリーフがあります。非常に美しいです。恐らくこういった石棺にはいろんな枕がありますが、これはその中でもトッ

ブラスの美しさを持っていると思います。また、石棺も表面を見てみますといろいろな仕上げの粗さといえますか、面の仕上げを変えていまして非常に芸術性の高い作品になっています。

またそれだけではなくて、まずこの石が出るのが香川県の中央部にあります国分寺の鷲ノ山というところなんです。そこから巨大な岩を切り出して、それを加工するというところまで当時の人たちは技術を持っていたことがわかります。さらにこの香川県の中央部の巨大な石を香川県一円に運んでいます。加工してから運んだのか運んでから加工したのかはちょっとわかりませんが、香川県一円に運ばれていますし、一番遠いところでは大阪府まで運ばれています。海を越えてこういったものを運ぶ技術まで当時既にあったようですし、逆に、九州の阿蘇山の近くで取れた阿蘇の溶結凝灰岩という石で造られている石棺が、香川県に二つ運び込まれています。観音寺市と屋島の近くの二カ所にあります。なぜわざわざ遠くから石棺を取り寄せたりするのはよくわかりませんが、ひょっとすると、この地域にいた人が自分の出身地の石を求めて取り寄せたのかもしれない。

(スクリーン：王墓山古墳の発掘調査風景 1) そして、実はこのあたりから弘法大師の話に近づいてくるんですが。これは王墓山古墳の発掘調査のときの写真です。たしか昭和 57 年ですか。発掘調査自体は非常に古いものです。実はこの場所は善通寺市内の有岡の中央部にある小さなミカン山だったんですけれども、個人の土地で、そこを宅地造成するために発掘調査を実施しました。緊急の。そうしましたところ、このような石室が出てきました。非常に珍しいです。(スクリーン：王墓山古墳の発掘調査風景 2) これ、本来は上に全部天井石が乗っかっていて、写真左のこちらから羨道を通って玄室に入る構造なんです。もう既に全部の天井石が失われてしまっている状態です。盗掘によって失われています。ですが「閉塞石」と呼ばれるものや、石室の中央部に「石屋形」と呼ばれる遺体の安置施設が残っています。これは板石を加工して作っています。実は、石屋形というのは九州の熊本なんかにはよく分布するものですが、中四国では初めての発見です。これもひょっとすると、この古墳の被葬者が九州地方と密接な関係があった方なのかもしれません。

(スクリーン：王墓山古墳の発掘調査風景 3) そして、盗掘を受けてはいましたが、大きな天井石が中に落ち込んで盗掘者の手はその下まで及んでいなかったのも、おびただしい数の副葬品が発見されました。数が多いだけではなくて非常に優れた金銅製品、ほとんど奈良のような日本の当時の中心部からしか見つからないような、立派な金銅製品が見つかりました。

(スクリーン：王墓山古墳の出土遺物) こちらがその副葬品。これはまだ一部です。写真の下のほうに写っているのが馬具類で、金銅製のものがたくさん出てまいりました。恐らく香川県ではこれだけの発見は初めてのことです。それから玉類。それから馬具、銅製の鈴もあります。刀があつて、たくさんの須恵器も出ていますが、この真ん中にあるものが金銅製の「冠帽」です。古墳の発掘調査ではよく鉄製の鎧兜なんかが出てきますが、これは兜ではなくて冠です。金銅製で、青銅の板を加工して巧みに作ったものです。それからほかに特筆できる遺物として、今、線で囲みましたこれですね、銀造製の象嵌の入った鉄刀。刀が計五本出てきていますが、そのうちの一本に銀製の象嵌がありました。(スクリーン：銀象嵌入鉄刀の X 線写真) これが X 線写真を撮ったところです。この部分を見ていただくと、太陽のような星のような模様が見えています。これ実は、鉄の刀身にたがねで溝を彫って、その溝の穴に銀の針金を埋め込んで装飾したものです。「連

弧輪状文」と呼ばれます。刀装具、つまり刀のつばとか飾り金具に象嵌の装飾がつくのは古墳時代の終わり頃から増えていきますが、こういった刀の刀身に象嵌されているものというのは非常に珍しいというか、地方の豪族でも相当有力な豪族でなかったら持てないようなものだと思います。これと同じような象嵌を持っている刀が日本各地で一応見つかっていますが、そのほとんどがそれぞれの古墳群の中の首長墓のようなところから発見されています。一番わかりやすいところでは、奈良の斑鳩、法隆寺の近くで発見されて調査された藤ノ木古墳。あそこで出てきた刀にも実はこれと同じような連弧輪状文の象嵌があります。

(スクリーン：冠帽の実物と復元物) それから、実はほかにも藤ノ木古墳とは共通点があるものがあります。これは王墓山古墳から金銅製の冠帽が出土したときの写真です。復元すると、こういうふうな丸いヘルメット状のものになりますが、ちょっとこれだけではわかりにくいのでここからさらに復元した写真をお見せします。本来はこういった立飾りが付いていました。最初の写真を思い出していただくと、これがべったんに潰れています。石室が崩壊していますから落ちてきた石で潰れたのではないかと考えがちですが、縁をそろえてきれいに潰れています。これは恐らく、石室の崩壊によって潰れたのではなく被葬者が埋葬されるときにその人が使っていた冠をきれいに潰して折り畳んで、使えなくしてここに副葬されているようです。実は藤ノ木古墳の石棺の中からも同じような金銅製の冠が出ていますが、あれも潰して、使えない状態で副葬されています。同じような考え方があったのかもしれませんし、わりと藤ノ木古墳と王墓山古墳の副葬品には共通点が見られるということでも注目されています。それから、金銅製のこういった冠類ですが、鉄の兜類っていうのは大体同じような形のものが出てくるんですが、金銅製の冠類っていうのは全く同じような形のものとは出てきません。それぞれがみんな違った形をしています。ですからオーダーメイドみたいなかたちで作られたのかなとも思われますが、(スクリーン：朝鮮半島の冠) これ、王墓山古墳のものちょっと形が似ています。ただ、王墓山古墳のものは「冠帽」ですので、頭を覆い隠す帽子のような形をしています。「冠」にこういうもの(頭を覆い隠すもの)がついたものを特に冠帽と呼ぶんですが、写真のものはその冠部分だけのようものが出土していて、これは実は朝鮮半島の福泉洞古墳(韓国・釜山)と呼ばれる古墳から出てきているもので、形としては非常によく似ています。

こういった冠類っていうのは優秀な工人集団が作っていますが、朝鮮半島から直接もたらされたものか、工人が日本に帰ってきて作ったものかはまだよくわかりません。ただ、日本国内でこれまでに発掘調査された古墳の数っていうのは何百基どころじゃないですね、もう数千基いつているかもしませんが、冠が出てきている古墳ってまだ30例ぐらいしかありませんので、王墓山古墳がいかに身分の高い人の墓であったのかということがわかります。恐らくこの辺り一帯を治めていた豪族のトップの人の墓と見て間違いのないと思います。

(スクリーン：王墓山古墳の保存修理工事風景1) 実は王墓山古墳ははじめ開発目的で、記録保存というかたちが済めば取り壊される運命だったんですが、発掘調査で確認された内容がとても貴重なものでしたので、これはもう壊すことができないということになりました。まず史跡指定を得て、国から補助金をいただいて、買い上げて公有地にして保存整備事業を行うことになりました。私は発掘調査の経験はありましたが、保存修理事業というのはこのときが初めての経験でした。そのときに文科省へ行って、いろいろ担当の先生方にご指導していただいたんですけども、そこで大変な注文がつかまりました。発掘調査をして何を調べるかという

と、当時の人たちがどんな知識、技術、それから材料、道具を持ってこの古墳を造ったかを解明しなさいと。そして、その道具や材料を再現するかたちでこの古墳を復元しなさい、というふう注文がきました。とても難しいことを言われたなと思ったんですけども、わかりやすく言えば、今、日本国内にはさまざまな文化財があります。建築ではかやぶきの屋根とか、檜皮葺の屋根とかありますが、ああいったものについてはもう職人が減ってきているんですね。それにカヤや檜皮を採取するような場所もなくなってきています。ですから今、文化庁が力を入れているのはカヤを育てるところを作ったり、檜皮が取れるような森を保存したり、それらを集めてストックするようなどころを作ったり、またそういったものを駆使して古い文化財を復元できる技術者を育てています。技術や材料といったものが途絶えてしまえば、古い文化財の修理ができません。これも極端な話ですけども、こういった古墳についてもちゃんと修理をするためにはその当時の技術や知識の保存までもが必要だという考え方です。

(スクリーン：王墓山古墳の保存修理工事風景2) ただ、その中で非常に面白いことがわかってきたのが、例えばこれ。墳丘の盛り土の断面になります。茶色い土と黒い土を交互に積み固めてっていうようになっていきます。これを分析しますと、黒い土というのはもともとこの辺にあった土に植物を焼いて作った炭や灰と、海水から取ったにがり分を混ぜて突き固めていることがわかりました。これ実は造園で今でもやられています。真砂土に石灰を入れて、にがりを入れてたたいて固めていく、あの技術がこの時代からあったようです。そしてこういった非常に硬い、実はこれ乾いてかちかちになるとコンクリートのように固まって金属の掘り具でもなかなか受けつけないような硬さになります、こういった非常に丈夫な墳丘を作る技術がありました。

(スクリーン：王墓山古墳の保存修理工事風景3) これは石室の外側を見たところです。そしてこれが石室を造りながら埋めていった土なんです、灰色の土がたくさん使われています。これは粘土です。非常にきめの細かい粘土で、石室側に厚い粘土を持っていくことで防水効果を高めています。ですからただ単に石を積んで土を盛ったものではなくて、こういった当時の土木技術の粋を集めた、石室内に水が漏ってこない、壊れにくい石室というのをそういった技術を持って作り上げているということがわかりました。当然こういった技術は、お墓だけではなくて水路を直したり、この当時から小さな池とかはありますから池の堤とかを直したりする技術にも使われているはずですよ。豪族は、その地域の農耕を支えるためにこういった灌漑治水の工事も行っていたはずですよ。

それで、実はこの古墳の調査をしていてこういうものがわかってきたときに、ふと思ってしまったのが、まずこの地域でこれだけの古墳が造れるのは誰か。

佐伯氏しかいません。この辺りには。で、佐伯氏の中でもトップクラスのお墓であろうと。そうすると、極端に考えると弘法大師の直接のご先祖様の可能性もあるわけです。もし弘法大師がこういった先祖の持っていた蓄積された土木技術や知識を身につけていたとしたら、そのあとの満濃池の築堤工事なんかを短期間で修築したとか、そういったところにまでお話が繋がってくるのではないかと。そう考えてみると、ほかにもまた共通点が出てきます。(スクリーン：満濃池の航空写真) これ、満濃池の写真を出しました。(スクリーン：王墓山古墳の石室内部) 並べて、王墓山古墳のこれは石室の写真です。石室のほうをよく見ていただくと、大体これはみんな同じなんですけども、石室は上にいくほどだんだん狭くなっていったアーチ型の

構造になります。これによって左右からの揺れとか、上からの圧力に耐える力を持っています。満濃池のほうですけども、ここの堤が当時では珍しいアーチ構造を持っています。現在の堤も当時からあった堤の上に盛り足して造っています。それから今これ白で「○」をつけました。ここには現在の満濃池の「余水吐」があります。農業をやられている方はよくご存じだと思いますが、この辺りのため池でも、すべての池に余水吐というのがあります。何かというと、急な増水で水があふれるときに、どこでもあふれては困ります。あふれた水が堤をどんどん削って壊れていきますから、あふれた水が逃げる低い場所を一ヶ所だけ造っておきます。そういうところは石積みであったり、今ではコンクリートがほとんどですけども、そういうものが必ず必要になります。つまり余水吐とは池の堤防を守るための構造物です。現在、ここに巨大なコンクリートの余水吐がありますが、実はこの反対側、こちら側のこの辺りにかつて余水吐があったそうです。「弘法大師のお手斧岩」と呼ばれているそうです。満濃池の築堤は、もともと国から派遣されてきた専門の築池使、つまり池の専門家の人が指導してずっと造っていました。完成間近になってどうもうまくいかないの、弘法大師が派遣されてきて残りを短期間で工事したという記録になっているんですが、全部やり変えたわけではないんです。弘法大師が来て数カ月で仕上げるっていても、もともとからできるわけありませんから、最後の大事な部分の仕上げを行ったというふうを考えられます。それでも、余水吐を造るというのは結構難しかったのではないかと思います。なぜかという岩盤を切り開いて余水吐を造る必要がありますが、当時は大変な技術だったと思われま。ところが、この王墓山古墳の石室を見ますと、これ、石屋形のこの部分ですね、丸いくぼみがたくさん見えるのがおわかりになりますか。これは硬い石を平らにするために、恐らく鉄製の鉞のような工具で削った跡です。もうこの古墳の時代にも、こういった非常に硬い石を山から四角く切り出してきて、それを鉄製の工具で削って加工する技術があったと。恐らく弘法大師もこういった非常に焼きが入った硬い金属の道具を使って岩盤を開削して、この満濃池の余水吐を造ったというふうと考えられます。ですから、どこでこういった知識を身につけたのかということ、その出身母体である豪族自体が知識を持っていたということに話がつながっていきます。

それで次ですが、文化庁からの注文の分です。（スクリーン：王墓山古墳の保存修理工事風景4）古墳の壊れているところを直していきます。これ、石室が大きく変形しています。石屋形も押されています。これを真っすぐに造り変えて、周りの土は叩き締めを行ったり粘土を使ったりして復元をしていきました。それで、ポイントになるのがこの部分なんです。石室の壊れている所。当初は石室の天井石が失われたことで、周りの土の圧力によって壁が押されてまるく張り出したのかなと思ったんですけども、どうも違っていました。あとでまた写真を出しますが、近くにある菊塚古墳という古墳をこのあと調査したときにわかったんですが、どうも大規模な地震によって壊れている。善通寺のこの辺りは巨大な地震がこないと思ったらそれは大きな間違いです。過去に、この古墳が造られたのが6世紀代ですから、それ以降に巨大地震がこの辺りを襲っています。この話は後でまたふれます。（スクリーン：王墓山古墳の保存修理工事風景5）そして、石室を復元しました。奥壁を見ていただくと、下3分の1ぐらいはオリジナル、真ん中の辺りが変形していたものを積み直したところ、上のほうはなくなったところを補填して復元しています。（スクリーン：復元工事完了後の王墓山古墳全景）これだけの形で復元が終わっています。

(スクリーン：宮が尾古墳の内部) それから、これも近くにある宮が尾古墳。王墓山古墳の次に整備した古墳です。最初に見てもらったように、有岡古墳群としては5基の前方後円墳(歴代の首長墓)が国の史跡に指定されていますが、一般的な大きさの円墳も1基、国の史跡に加えられています。それがこの宮が尾古墳なんですが、なぜ史跡に加えられたかという日本屈指の「装飾古墳」つまり壁画がある古墳だからです。

(スクリーン：宮が尾古墳の壁画1) こういった線刻による壁画があります。特に興味深いのはこの部分ですね。船です。こういった画になります。大勢の人が乗っている船です。実際に市内から古墳時代の船の櫓(かい)が出てきています。(スクリーン：善通寺市出土の櫓) これは2メートル近くあります。この櫓が出てきたのはすぐそこなんです。善通寺の伽藍と駐車場の間に済世橋がありますが、あの周辺から出てきたものです。2メートル近くありますから結構大きな船がこげるものだと思います。(スクリーン：宮が尾古墳の壁画1) 割とこの形から見て丸木舟っていうふうに解釈されがちなんですけど、この一番下の船を見てください。よく反り上がって、先に飾りのようなものがついてたぐさんのオールが出ています。(スクリーン：構造船の模型) この辺りでは見つかっていませんがこういった「構造船」だったと思われます。たぐさんの人が乗っているということ。(スクリーン：宮が尾古墳の壁画2) それからこちらの壁画ですね。これは小さな櫓を拡大して描いていると考えていただけたらと思います。恐らくこういった、瀬戸内海だけではなくて朝鮮半島や中国まで渡れるような構造船ではなかったらと思います。

「装飾古墳」っていうのは画によって飾られている古墳ということで、こういう名前がついています。キトラ古墳とか高松塚古墳のような顔料を使って描かれているすごい古墳もありますが、全国的に一番多いのはこういった線刻画です。柔らかい石の壁面に釘のようなもので、先端のとがった鉄製品とかで引っかけて、細い線で画を描いています。線刻は日本中にあるんですが、宮が尾古墳のものは恐らく非常に見やすい、わかりやすい画です。日本各地にあるものの中では稚拙な画が多かったり、わけのわからない線、落書きなんかで覆われているものもあるんですが、宮が尾古墳の壁画というのはとてもわかりやすい壁画です。大勢の人たちが何らかの儀式を行っている様子が描かれていますが、これは当時の葬儀の様子と考えられます。また装飾古墳の壁画のなかで一番よく登場するモチーフが、船と馬と鳥です。これは単なる画というよりは、死者の魂を慰める鎮魂のためであったり、魔よけであったりすると考えられていて、船と馬というのは死者の魂を遠くにある黄泉の国に運ぶための交通手段として描かれていると考えられます。ただ、想像だけではもちろん描けません。恐らくこの絵を描いた人は実際にこういった船を見ていると思います。この構造船なんかの表現からすると、恐らく、しっかりこういった船を見た人が描いていると。ただ、誰でもは描かないです。恐らくこの絵を描いたのはまじない師、シャーマンだと思います。古墳造りの、その当時の葬儀の様子を順次指導していくような過程でこういった壁画も一緒に描いたんだと思います。

実は、善通寺市内にまだたぐさんの線装飾古墳、線刻の壁画があるんですが、同じ人が描いたと思われるような非常に似た絵がたぐさん出てきます。あ、それとすみません、この装飾古墳なんですけども、「日本全国にある」と言いましたが、数はすごく少ないです。わかりやすく言うと四国では香川県にしかないです。ほかの三県では見つかっていません。香川県でも西のほう、西讃地区に偏っていて、一番多いのがここ善通寺市で、坂出に数基と観音寺市にも1基ありますがそのぐらいしかないものです。この辺りでこういった大きな船があった、見たとすると、恐らく多度津などに港があったのかもしれないし、そういったところに

佐伯氏がこのような船を持っていた可能性も考えられます。

(スクリーン：宮が尾古墳の整備工事風景) これは宮が尾古墳の整備の写真です。こういったかたちで毎年4月29日には公開日を設けて、ほかの古墳も含めて公開日を設けて、職員や文化財保護協会の方の協力を得て皆さんに見ていただいています。

(スクリーン：安造田東三号墳の調査風景) それから次なんですけども、実は不思議なものが見つかりました。これはまんのう町の古墳です。安造田東三号墳といいます。宮が尾古墳とほぼ同じ時期の古墳と見ていただいているんです。写真は羨道です。左側の奥に玄室があるんですけども、のちの時代に何らかの理由で副葬品が羨道まで運び出されてここに散乱していますが、ここだけでも刀があったり馬具があったり、弓飾りがあったりしています。実はこの古墳の発掘調査で非常に不思議なものが出てきました。

(スクリーン：安造田東三号墳出土のガラス玉) これです。ガラスの玉です。非常に複雑な模様をしています。大きく見えますけども、実際には1センチ5ミリよりちょっと小さいぐらいの小さなガラスの玉です。不思議な模様ですね。ガラス玉と言いましたが、これ、出てきたときに私も最初は何かわかりませんでした。アルバイトの学生が首をかしげて持ってきて、「何？」って聞いたら、「こういうのが出てきました」と。後世の時代の混入品じゃないのかということ、出た場所を見に戻ると、その玉があった場所に形が残っていて明らかに後世の混入が考えられないような場所だったので、これは副葬品に間違いないと。じゃあ材質は何だろうと思って、洗って調べてみると、ガラスとしか思えません。なのにこの複雑な細かい模様です。国内でこんなものはこれまでに見られたことがありません。しかも、よく表面を観察するとわかることなんですけども、この模様が金太郎飴のように反対側まで抜けているんです。これ、どこで割っても同じ模様が出てきます。そんなものがガラスの玉であるのかと。これは困りました。

まず、古墳の石室から副葬品として出てきたことには間違いない。そして後世の混入品でもない、ということで、これはまず奈良の国立文化財研究所に持ち込むことにしました。ちょうど善通寺市ご出身のマスダアキラ先生という方が平城宮跡の発掘調査においでだったので、その先生を通じて奈文研に持ち込んで、そのとき日本の考古のトップクラスの先生ですね、佐原真先生にも見ていただきました。最初にお二人にこの玉を見せたとき、二人同時に首をかしげました。「何だこれは？」と。それで一言言われたことがあります。まず蛍光エックス線分析っていった細かい成分がわかるような分析方法があるんですけども、「ただ、このガラス玉は模様が細かすぎて、今の精度では照射して分析することはできない」と。そこで「新しい技術が確立されたら分析しよう」ということになりました。「見た目では、ひょっとしたら西アジアのほうから伝わってきたガラスではないのか」ということも言われました。最後にお二人がおっしゃったことですごく印象に残ったのが、「正倉院にもないものが何で地方の古墳から出てくるのか」。私も「え。それは地方に失礼では？(笑)」と思いましたが、逆にこの一言がすごく良いヒントになりました。この玉の存在を考えるうえで、あとで大事なヒントになってくるんです。

(スクリーン：盛土山古墳出土のガラス玉) 実は香川県ではそれまでにも珍しいガラスの玉が出ていました。これは多度津町の盛土山古墳というところから出てきたガラス玉で、トンボの目玉のような模様ですので「とんぼ玉」と呼ばれています。これは出てきたのが古くて、今は東京国立博物館が所蔵しています。上野に行

けば見られます。(スクリーン：安造田東三号墳出土のガラス玉) こういった不思議なガラス玉が何でこんなところから出てくるんだということがあるんですが、ただ、奈文研で見ても答えは出ませんでした。そのときにちょっと途方に暮れて、榎原考古学研究所にいた友人に電話して「実はこうだったんだけど」っていうことを言ったら、その人が言いました。「あの二人に見てもらってわからないんだったら、日本の考古学者、誰が見てもわからない」と。それでアドバイスされたのが、「西洋のガラスの研究者に見てもらったらどう？」って言われて、「なるほど」と思って、一番近場でオリエント美術館に電話をしてお聞きしました。ちょうど谷一先生っていう方がいらっしゃって、もう長い付き合いになるんですが、『なんでも鑑定団』によく出ているの、ご存じですか。エジプトとかペルーやインカのほうの史料が出てきたら大抵、鑑定されています。あの谷一先生が電話口に出てこられて、「金太郎飴みたいなガラス玉が出てきました」と。すると二つ返事で「ああ、ありますよ」って。「ちょっとファックスを送りますから」って言って送っていただきました。

(スクリーン：ロシアから出版のガラスに関する報告書) これです。ロシア語です。日本の報告書と比べると精度があまり良くないんですが、右のページに、確かに金太郎飴のような作りをしているガラスの絵がたくさん載っています。これ、先生が訳として小さく鉛筆で書き込んでいますけども、黒海沿岸部で出てきているガラスの報告書のように。4世紀ぐらいにはその辺りでこういった玉が作られていることを教えていただきました。

(スクリーン：笹川氏自作のガラス玉。素材→経過→完成物) ちょっとこれは自分の話になりますが、私、割と手先が人より器用と言われるんで、こういうのを作るのも好きなもんですから、作ってみました。本当に金太郎飴みたいなものをガラスで作れるのかっていうのがあったので。

昔の人はこういった色のついたガラスの素材を作るところから始めますが、そこまではちょっとできませんので私は工芸品店へ行ってガラスの棒を買ってきました。そしてバーナーで溶かしながら、赤いガラスを熱して、白いガラスを巻きつけ、青いガラスを巻きつけて、その上に白い線を溶かしてつけて、それをさらに熱して伸ばすとこのような素材ができます。これを7本束ねて熱して溶かしつけたら、こんな模様の玉ができるわけです。安造田東三号墳のガラス玉もこういう作り方をしているのがわかりました。(スクリーン：盛土山古墳出土のガラス玉) こちらの盛土山古墳の玉なんですが、実はこちらのほうはこういう段階(束ねる前のガラス)の玉を薄くスライスして、溶けたガラスの表面に貼りつけたものなんです。これもやはり西アジア由来のもののように。

(スクリーン：日本から出版のガラスに関する報告書) こちらを見ていただくと、これが日本で出版されている本になるんですが、やはり「ソビエト考古学からの引用」となっています。この絵のほうを見ていただきますと「黒海周辺出土のトンボ玉」と出ています。それから「モザイク模様の玉」として、ここにモザイクガラスが分類されていて、この中に安造田東三号墳のものと同様に非常によく似た模様の玉があります。これはちょっと実測図、イラスト的に描いていますので本物かどうかわかりませんが、よく似たものがあります。さらに注目していただきたいのが、その上です。鳥や人の顔が描かれたガラス玉。これも実は私が作ったものと同じような作り方をしていますから、スライスすると、いくらでもこういった模様ができるんです。これを貼りつけた玉も実際に出ています。

実は、そういった玉がとても意外なところからも出ていました。（スクリーン：朝鮮半島のガラス玉）これは実は朝鮮半島で見つかっています。韓国、慶州の味鄒王陵（ミチュワンヌン）地区です。これも向こうで不思議がられているのが、その味鄒王陵地区の王陵ではなくて、その周りにある別の小さな古墳から出てきているということ。奈文研で言われた、「正倉院にもないものが何でその小さな古墳から出てくるんだ」というのと同じような現象が起きています。しかもこれ、ガラスの玉にある顔（の絵）を見ていただくと、東洋人の顔ではないですね。明らかに西アジアのほうの人の顔です。こういったものが朝鮮半島まで届いていました。その工芸品がもたらされるときには、工芸品だけが歩いてくるわけじゃありませんから誰かが持ってきます。ということは恐らく日本でも、その人から、その外国の情報を得ることがあったのではないかと思いますし、そういった玉を手に入れた豪族というのは諸外国の、断片的な情報かもしれませんが、そういうものを身につけていたんじゃないかと思います。（スクリーン：黒海～日本の地図）距離です。この黒海北岸の辺りで4世紀代に作られているガラス玉です。それが出てきたのが日本です。相当な距離を移動してきています。

奈文研で言われた、「新しい技術が確立できたら分析しましょう」。自分が生きている間にそんなもののできるわけがないと思っていたら、できました。

安造田東三号墳の発掘調査は平成2年だったんです。そして奈文研が新しい分析方法を作ったのが平成26年です。このときに電話をいただきました。「もうすぐ記者発表するけど、判かったよ」ということで。もうすごいです。非破壊分析といって、かなり以前からいろんな方法はあったんですが、今では人間の体をCTスキャンで撮るようにこんな小さなガラス玉の内部を、色ガラスがどんなふうに使われているのか、またその断面を破壊することなく見ることができるようになっていっています。こういった技術が確立されて、分析していただいた結果がこれです。ガラスの種類、細かい触媒に使っている材料まで全部わかりまして、ササン朝ペルシャという領域で作られたものであるということが科学的に立証されました。こういったものが、なぜこういったところから出てくるのかというのが大変不思議です。

（スクリーン：安造田東三号墳出土のガラス製品4つ）これは安造田東三号墳から出土したガラス製品です。実は安造田東三号墳からは宝石類は出ていないんです。王墓山古墳とかそのほかの割と大きな古墳ですと水晶、瑪瑙、翡翠、碧玉、こういった当時の宝石類を加工して作った見事な装飾品が出てきますが、この安造田東三号墳で出てきたのは全部ガラスです。写真右下が先ほどの、西アジアからもたらされたガラス玉。左上は恐らく東洋で作られていると思いますが、これもとんぼ玉といえます。緑色のガラスにちょっと黄色っぽい斑点がついています。左下も青いガラスに黄色っぽいガラスの斑点がついています。右上、これは勾玉ですが、これもガラス製の勾玉です。

宝石の首飾りとガラスの首飾りっていったら皆さん、どちらも宝石じゃないかと思われるかもしれませんが、実は当時は違います。『肥前国風土記』にこういうフレーズがあります。「その人美き玉有り、愛しみて固く秘す、定めて命（みこと）に服ふこと肯はじ…」これはどういうことかということ、景行天皇が九州地方を巡幸した際に、地元でとても美しい玉を一人で隠し持って楽しんでいる男がいたと。「例え天皇がよこせと言っても俺はやらないぞ」と言っているやつがいますよっていうのを天皇が聞いて、その玉がどうしても欲

しくなって、人を行かせて男を捕えて玉を取り上げたという話です。そのぐらい当時は、こういった装飾品にたいする執着があった時代なのかもしれません。

あとこれ、星の数が七つなんです。実はガラス玉で模様を貼りつけられているものの斑点の数って、七つが多いんです。非常に幸運といますか、ラッキーセブンです。日本の貨幣で一番古いのは和同開珎と言われていましたが、「富本銭」っていうものももっと古いということがわかりまして、富本銭の「富本」と書いた両側にも実は七つ星がついています。当時はそういった聖なる数として珍重されたもので、しかも、これだけカラフルな模様で七つの星がついているような玉であれば、恐らく偉い人であれば人から取り上げてでも自分のものにしたいと思ったかもしれません。そういったものが、片田舎の古墳から出てくるわけです。

ここでちょっとその順番を見ていきたいと思います。（スクリーン：ここまでの話を年表で整理）これ、皆さんにお配りした資料の中にも入っています。まず、類似したガラス玉が西アジアで生産されていた頃が大体4世紀代。そして多度津町の盛土山古墳が造られたのが5世紀代で、ここから西アジアのトンボ玉が出てきています。王墓山古墳は6世紀中頃に造られています。ここでは宝石類の装飾品がたくさん出てきましたが、残念ながらガラスの玉、こういったトンボ玉とかは出てきていません。そして7世紀初頭に造られたのが安造田東三号墳で、モザイクガラスが東アジアで初めて出ました。

それから弘法大師の活躍がこういった年表（774年・誕生、818年・満濃池修築工事、835年・入定）になるんですが、最近、このようなニュースが出ていました。「8世紀中頃の平城宮に破斯の記録が発見された」と。765年の記録で、破斯というのはペルシャ人のことです。（スクリーン：該当の新聞記事）そのときの報道がこれです。平成28年の新聞記事になります。「平城宮にペルシャ人の役人がいたことが木簡の分析によってわかった」と。またこんなことも書かれてあります。『続日本紀』によると、736年に遣唐使が連れ帰った唐の人三人と破斯一人、これが聖武天皇に会って、そのあと破斯の人・李密翳に位を授けた、役人に登用したとあります。ただ、それ以降の動向は知られていないと。8世紀の平城宮にペルシャ人が役人として仕えていたということがこの記録からわかるようなんですが、当時の人たちも、国際的な知識が必要だったんだと思います。今でこそ通信施設もいろんなものがありますし、外国の動向なんかもわかりますが、当時では恐らく、日本だと朝鮮半島や中国の情報っていうのは断片的に入ってくるかもしれませんが、それより西のほうの情報っていうのは恐らく何もなかったと思いますし、そういったところの国の情報を持っている知識人っていうのは非常に外交的にも役に立つものです。また危険もあるかもしれません。侵略を狙っている国があったりしたら大変なことですし、そういうふうな情報を得るうえでは、そういったペルシャ人の存在というのは非常に貴重だったのかもしれない。

ペルシャ人が日本までやって来る場合に、当時の交通手段としては馬や船ぐらいしかありません。「じゃあガラス玉とかが渡ってくるのにどのぐらいの時間がかかったんだろう」と思って、一回考えてみました。地球の直径が1万2,742キロ。モザイクガラスの移動距離ですが、単純に直線距離で考えると大体1万2,000キロ。ちょうど同じぐらいになります。じゃあこれだけの距離、どのぐらいの時間をかけたらやって来られるんだろうと。成人は普通に歩いたら一時間に4キロ進みますが、一日に10時間歩くと、これはちょっと大変ですけども40キロ/日。そうするとペルシャから日本までは300日で来られるんですね。驚きました。一年

かけずにやって来られるんだと。もっとわかりやすくすると、お遍路さんです。お遍路さんは総延長 1,122 キロ。これを 10 回まわった人や 20 回まわった人っていますけど、10 回まわった人はほぼ同じ距離を歩いたことになります。そんなむちゃくちゃな距離ではないんですね。しかも、こういうことを考えたときに思ったのが、このペルシャ人の李密翳っていう人が何者かということ。実はいろんな研究者が分析しています。もともと役人であったとか、医者であった、技術者であったとか。で、商人っていう説もあるんです。私も実は商人じゃないかなと思っています。ああいったガラス玉が日本にもたらされているのは、人伝てに来たというよりは、生産国の辺りから商人が直接そういった珍しい品を持って、ずっとずっと東のほうに旅をしてきたのではないのかなと。商人であるとする馬も使っているでしょうし、もっと短い時間で多くの荷物が運べたかもしれません。それで、奈文研の先生方の言葉「正倉院にもないものが地方の古墳から出てくる」、その理由の一つとして「商人が持ってきたとしたら、どうだろう」と。

国家間での贈り物のようなかたちで移動してきたものが正倉院に入りますが、そういうものも途中で行き来している船に便乗したりして日本に渡ってきて、それで豪族がいるようなところの港にもペルシャの人たちがやって来る。恐らく一人や二人ではなかったんじゃないかと思えます。そうすると当時の地方の豪族は、西アジアのほうから顔の違う、目の色も違う、肌の色も違う人がまた来たよと港に駆けつけて、その人を囲んでいろんな情報を得たり物を交換したりしたんだと思えます。すいません、これは考古学的な部分を飛び越えてかなり推測の域に入っていますけども。でも例えば、多度津の港に日本と中国を行き来しているような船が寄港したときに、そういう人が降りたって、情報を聞きつけた周辺の力や物を持っている豪族が集まってきて、話を聞いて、珍しい品物を自分の持ち物と交換したりして、そういったかたちで手に入れたものが古墳の中に入っていたのではないかなと私は考えています。実際、西アジア由来とされるそういった小さなガラス玉などが発見されている古墳というのは、盛土山古墳とか安造田東三号墳だけではなくて日本各地の小さな古墳にも例が結構見られます。同じようなことが全国的に起きていて、このようなペルシャ人というのが日本人にも既に認知されていた可能性があります。（スクリーン：ペルシャ人を表した面）これは正倉院にあるペルシャ人のお面なんですけども、デフォルメはされていますけどもやはり全くの想像というよりは、ある程度作者本人が見て作っているんじゃないかなという印象を受けます。そうすると、私たちが想像する以上に当時の豪族というのは優れた技術や知識を持っているだけではなくて、近くの外国の情報なんかも持っているような、国際感豊かな人たちだったのではないかということも考えられます。

（スクリーン：『善通寺伽藍并寺領絵図』）それで、佐伯氏のほうに話を戻してみますと、佐伯氏の館はどんな感じだったのかと。一番古い絵図でこれしかないの、鎌倉時代のものになりますけども、これはこちらの総本山善通寺に伝わる、当時の寺領を示した絵図（重要文化財）になります。絵図の中央に善通寺の伽藍（東院）があって、こちらに誕生院（西院）があります。この誕生院を佐伯氏の館と見ていいと思えます。恐らく古墳時代の頃にも佐伯氏の館はあって、そういったところにはいろんなものが収められていたでしょうし、それから奈良、平安時代などいく過程で外国から入ってきたいろんなものがそこに貯まっていったかもしれません。弘法大師が生まれた頃には既に、佐伯氏の館の中には多分そういった文物を置いているような図書館や美術館のような部屋もあったかもしれませんし、朝鮮の人、中国の人もいたかもしれません。もしくは中国語や韓国語をマスターしているような人がいて、小さい頃からそういったものをどんどん吸収

できる立場にあったのではないかとということが考えられます。ですから、弘法大師という人は突然こういった場所に誕生したのではなくて、この地にあった、古くから連綿と受け継がれてきた文化や知識や技術がこういった佐伯氏の館、佐伯の豪族の中に蓄積されていて、そういったものをまとめて吸収して、ああいう偉人が誕生したのではないかと考えるとすごく整合性があるような気がします。

(スクリーン：現在の善通寺市市街地地図) それから、今、鎌倉時代の絵図をお見せしましたが、実は最近の発掘調査でちょっと変わったことがわかってきています。これは善通寺市の今の市街地をお示ししていません。最初にお話した旧練兵場遺跡として発掘されているのが市街地の北の部分になります。中心市街地の部分って家がたくさん建っていて、わかりにくい部分もありますが、これが弥生時代の中期から奈良時代以降まで連綿と続いてきている大遺跡です。そして最近の調査でわかっているのが生野本町遺跡と四国学院構内遺跡です。生野本町遺跡は西高のグラウンドを整備するときに県が調査をして、グラウンドのなか全体は掘れませんので周囲の部分だけ、塀を作ったり水路を作ったりするところだけを調査しています。それだけの小さな調査ですが、大体7世紀から8世紀初め頃の遺物がたくさん出てきました。しかもそれが一般の生活に使われるようなものではなく、役所的な意味を持っているもので、「円面硯」という硯の一種が出てきています。硯などは普通の人たちの生活では使いませんから、もし出てくるとすれば役所か大きな寺院か、豪族の館ということになります。

そのあとで四国学院構内遺跡を調査しています。(スクリーン：四国学院構内遺跡の発掘調査) これがそのときの写真です。今図書館が建っているところの調査を教育委員会がお手伝いしたときのものです。さっきから見ていただいていた旧練兵場遺跡の、いくつも家の跡が重なり合っている雰囲気からすると、全く違います。これは特定の一時期だけ機能していたような場所になります。遺跡の重なり合いがほとんどありません。四角いのはこれ、全部堅穴住居です。何棟か出てきています。それと堅穴住居に伴って整然と並ぶ柱の跡がありますから、これは倉庫のようなものだったと思われます。向こう側にちょっと空き地のようなものも見えています。生野本町遺跡です。ですから、この二つの遺跡は一つの大きな遺跡のくくりの中でつながっていると見ていいと思います。それともう一つ、重要なのが、ここに溝が並行して見えます。これ、道路のようなんです。当時の非常に重要な道路。道路の遺構というのは実はわかりにくいんですが、両側の二本の溝が検知されることでそれを道路と判別しますので、これは道路の可能性が非常に高いものです。この延長線をずっと調べていくことで、同じような溝が直線的につながっていればはっきりと道だと判断できます。今は善通寺市の市役所庁舎の建て替え工事に伴う調査を行っていますが、これに延長するのではないかとというような溝も確認されています。

(スクリーン：現在の善通寺市市街地地図) そうして実は、その時期に、今のホームセンターがあったり前は派出所があったりした辺りですが、そこにお寺(仲村廃寺)がありました。これが佐伯氏の最初の氏寺です。古墳時代が終わったあと、ここに佐伯氏は最初の氏寺を建立しました。これは白鳳時代に建っていて、その時代の瓦も出てきています。そしてこれはある程度の想像ですけども、そのときに佐伯氏の館があったのもこの辺りではないかと。実際、四国学院構内遺跡からも円面硯が出てきています。それ以外にも仲村廃寺とほぼ同時期の瓦が何点か出ています。またちょっと不思議な点があるのが、仲村廃寺、これは方向を見ていただくと磁北(真北)を向いています。最初のほうに古墳時代の堅穴住居が真北を向いていますよって

見ていただいたのと同じです。大体その当時の方位っていうのは、磁石で指す方向の東西南北を向きます。ところが四国学院大学の構内遺跡では、仲村廃寺と同じ6世紀の末から7世紀代の建物であるにもかかわらず、磁北ではなくて既に条里方向に向いているんです。この道路も条里方向を向いていますから、このあと採用されていく「条里制」といった考え方が早めに、方位的な考え方が早めに採用されていた特別な地域ではないかと。そういうことから、ひょっとするとここが佐伯氏の当初の館があった場所ではないかなということを考えました。

じゃあ何故そのお寺（仲村廃寺）が今のこの普通寺の場所に移って、佐伯氏の館もこちらの誕生院に移ったのか。王墓山古墳のところでもご説明しましたが、それは地震です。恐らくあの地震がこういったものになり影響を与えたのではないかと考えています。王墓山古墳や菊塚古墳というのが造られた後に起きた巨大地震のうちで、普通寺の記録に残らないような古い時代の地震では何があるのか。調べてみるとこれ、実は結構有名な地震です。南海地震を考えるとよく紹介されるものですが、天武13年に起きた巨大な地震があります。

『日本書紀』というのは歴史書なので記録がたくさん書かれています。日本で起きた古い地震のことも書かれているんですが、基本的には何年のどんな時間帯にどの地方で地震が起きたぐらいしか書いていません。ところが、この天武13年の地震に関してだけは特筆してすごく詳しく書いています。とんでもない地震が起きたっていうことが書かれています。（スクリーン：『日本書紀』該当箇所抜粋）「人定まるに及んで…」これは「人定（ジンテイ）」って読んで時間を指します。今でいう亥の刻で22時頃、深夜ですね。「大地震あり、挙国の男女わめき叫びて東西を知らず、…」みんながパニック状態になってしまったと。「山崩れ河沸き、官舎・民家・寺塔・神社の崩壊されるもの算なく、…」「算なく」は数限りなく。「人畜の死傷おびただしく、伊予の…」これは道後だと思います。「伊予の温泉は没して出なくなり、土佐の南方の田苑五十余万頃…」大体今の計算で10平方キロメートルは「沈んで海となった。」と。東日本の大震災規模の、もしかするともっと大きかったのかもしれない。そういった地震が起きたことが記録されているんですが、ただ、残念ながら阿波と讃岐の記載はありません。よくあるのは、あまりにも被害がひどすぎて報告できなかった、というようなことも考えられます。

該当するとしたらこの地震なんですが、お寺や佐伯氏の館の移転理由が本当に地震なのかという点は、さっき見ていただいた…、（スクリーン：王墓山古墳の発掘調査風景1）王墓山古墳です。この石室の変形が地震によるものと見ていいんですが…。（スクリーン：菊塚古墳の発掘調査風景）こちらは菊塚古墳。これ、王墓山古墳と谷を挟んですぐ反対側に対峙して、同じ方向を向いている前方後円墳です。実はここの発掘調査でも石屋形が発見されました。しかも古墳の規模や副葬品から見てこちらにも佐伯一族が関連している古墳と考えられますが、時期が非常に近いので、この辺りにいた佐伯一族は中に大きな家族集団が二つあったのかなということも考えられます。残念ながらこの古墳も、写真をよく見ていただくと、これだけゆがんでいます。斜めから撮ったようにも見えますがこれは真正面から撮った写真なんです。すべての壁が同じ方向にずれています。石屋形もこれによって壊れています。王墓山古墳の場合は地山を割り込んで造っていますから古墳上部の変形で済みましたが、この菊塚古墳は下から全部盛り土をした古墳だったので石室の床面自体が傾いています。もう、ずれてしまった。とんでもない大地震です。こういう地震が起きたということは、

恐らく、善通寺市の当時の市街地の建物で建っていたものはないと思います。

(スクリーン：現在の善通寺市市街地地図) さっきの地図です。建物だけでなく、練兵場遺跡なんかにいた集団も相当被害を受けていると思います。恐らく、この被害を受けたあと、一番最初に移転したのは館だと思います。佐伯氏の館がこの位置（現在の善通寺誕生院があるところ）に移転するんですが、これもすぐは移転できません。新たに館を建てたりして、いろいろな準備を整えて、しかも恐らくこの国全体が大変な被害をこうむっていますから、佐伯一族も相当苦労したと思います。

そうすると、お寺を建て替えるのには一層時間が空いただろうと思います。実際、仲村廃寺、これは「伝導寺」とも呼ばれる善通寺の元になったと考えられるお寺なんですが、天武13年の地震が起きたあとの9世紀初頭までの瓦が出ていますから、仲村廃寺は地震後も何らかのかたちで存続していたんだと思います。ですが誕生院が落ち着いたあと…、こちらは記録があります、807年にスタートして813年に竣工したというこの善通寺の伽藍、弘法大師が創建したといわれている善通寺伽藍がつくられました。まあこれは創建ではなくて、前にあったお寺の再建というふうに考えたほうがいいと思いますが、それをここ（現在の善通寺伽藍があるところ）に持ってきています。実は、善通寺の伽藍からも7世紀中葉という古い時期の瓦が発掘調査で出てきています。ですから、その当時から善通寺伽藍も仲村廃寺も両方あったという考え方もあるんですが、恐らく同時に存在していたお寺ではなくて、これ、それぞれの方位を見ていただくとわかるんですが、東西方向を向いているお寺（＝仲村廃寺）から条里方向に向いているお寺（＝善通寺伽藍）に変わっていますから、これは当然、善通寺伽藍があとの時代のものになります。古い瓦が、しかも両方のお寺から同版で作られた瓦が出てきている理由というのは、恐らくお寺の建立というのも大変ですから、使える瓦などは全部転用して、こちらに持ってきて、それで創建が行われたのではないかというふうに考えています。そう考えてみると、もし天武13年の大地震が起きなければ、善通寺という街のかたちは今と全然違うものになっていたかもしれません。善通寺の今の街並みは今の伽藍を中心にできています。

(スクリーン：大正11年の善通寺市の航空写真) よく、「善通寺という街は総本山善通寺を中心とした門前町」という言い方をされますが、実際には、大きな中心市街地ができたのは門前町としてのつくりではなくて「軍都」としてのつくりになります。明治の初頭にここに師団が置かれました。師団が置かれるにしても、大体師団が置かれるのは県庁所在地なんですが、香川県では高松にはいきませんでした。これはやはり渇水時に高松が弱いというのを軍も知ったようで、善通寺市に軍を開設します。それによって練兵場も造られますし、師団が作られ、そして中心的な交通網である鉄道や道路も整備されて今の善通寺市ができました。今の中心市街地が形成されて、街並みが形成されていった。ですから、ひょっとすると軍が置かれなければ、当時のままだと善通寺は市にはならず善通寺町というままで存続していたかもしれませんし、もし地震が起きていなければ、善通寺という街のかたちそのものも今とは全然違ったかもしれませんし、佐伯氏がその地震によって被害をこうむらなければ、逆な意味でもっと発展した、別のかたちの街になっていた可能性もあります。ですから、歴史というものをこう見てくると、いろんな運命的なものをたどって、今の姿になっているんだなというのを実感してくる次第です。

これでスライドを使ってお話を終わりますが、私は長い間、30年近くこういう善通寺市の仕事に携わって、こういったすばらしい文化、文化財にふれたことを非常にうれしく思いますし、ありがたく考えています。今お話ししましたことも発掘調査によってわかったことをつなぎ合わせたものが多いので、これからの発掘調査の結果によっては、また書き換えられていくかもしれません。

今日は文化財のお話だけだったんですが、地震のお話にもふれさせていただきました。決して安全な場所ではありません。ひとつ気になっているのが、これも善通寺市で仕事をしている間に調べられたらなと思ったんですけども、さっきの天武13年の地震が本当に南海地震なのかなど。南海地震であれば、高知が津波なんかで壊滅的な被害を受けるのはわかるんですが、善通寺市にもあの二つの古墳、あれだけのものを壊すほどの揺れがくるのかなど。ひょっとすると、別な活断層がこの近くにあるかもしれないということを考えています。香川県でいうと東のほうでは長尾断層というのが見つかっていまして、最近、香川県の中央部でも法軍寺断層というのが見つかりました。その延長線であるこの辺りでは、そういった活断層は見つかっていませんが、ひょっとするとそういった過去の南海地震が動いたあとに連動したような別な活断層があるかもしれません。その辺は皆さんも考えて、できるだけの備えをしてください。この地域は地震が起こらないから耐震のことは考えなくていいっていうことは絶対ありません。あの二つの古墳を見ていただいたら、あれだけの揺れが今襲ったら、恐らくほとんどの建物は倒壊します。そういうことを考えれば、やはり皆さんにもそういったものにも取り組んでいただきたい。長い、これまでの善通寺市での文化財の仕事の中で、そういった当時の人たちが持っていた技術や知識なんかをずっと見てくると、当時の人たちもやはり長い歴史の中で地震とかいろんな風水害に遭いながら、それを乗り越えていく力を身につけて、新しい技術を応用して作ってきています。そういうものがどんどん見えてくると非常に面白いんですが、後ろにおられるこの方(壇上の講師の後ろには弘法大師像がまつられている)も恐らく、偉いお坊さんでありながら、やっぱり学者ですね、いろんな学問を身につけて、土木、それからいろんな他国言語にも精通されていた。

最後にちょっとだけお話しさせていただきたいのは、弘法大師が満濃池の築堤に来たときの記録というのが矢原家の家記に残っています。矢原家というのはまんのうの豪族で、弘法大師が満濃池の修築に来たときに自分の屋敷に弘法大師を泊めて面倒を見た豪族になります。矢原家も、その館の跡というのは実は今も、満濃池の堤を下りてすぐのところに残っていて見ることができます。実は、私が中学生ぐらいのときに社会科で考古学に興味を持って、そのときの先生に善通寺市に連れてこられて会わせていただいたのが、市内には護国神社・讃岐宮がありますが、その当時おいでた宮司さんだったんです。善通寺市の歴史を長く研究されている方で、本も出されていました。そのあと、私もちょっとその先生のところに個人的に、中学生でありながら何度か出入りするようになって、本をいただいて、「勉強しなさい、ここ見て来なさい」って言われて善通寺市内のいろんな古墳を見て歩きました。中学から高校になってもそれを続けていたんですが、ふと見に行きたいところがあって、高校の先生に「おなかが痛いから休ませてくれ」と言っとうそをついて、市内の山に入っていたことがありました。土器をたくさんカバンに詰め込んで家に帰ると、えらいことになっていました。「調子が悪かって家に帰ったのに、まだ帰ってないんですか?」。捜索隊が出ていました。えらい怒られた記憶があるんです。でもその言い訳としたら、私は高校生の頃からもう善通寺市に就職するための就職活動をしていたんだと、そんなふうに自分で言い聞かせています。それで、一番驚いたのが、ずっ

と研究者だった矢原さんって宮司さんですが、そう、矢原家の直系の末裔だったんです。こんなところでも弘法大師につながっていたんだなと思ってびっくりしました。矢原正久という当時の豪族が、弘法大師が来るからって、今か今かと館の近くで待っていると、弘法大師が弟子を従えてやってきて、自分から笠を取って丁寧に挨拶をして、「池が壊れてお困りでしょう」と。「今から工事に取りかかりますから、安心してお待ちください」そんな言葉をかけたようです。まるで偉いお坊さんがやってきたというよりは、大きなゼネコンがダム工事にやってきて、営業の人が説明したようなことです。そういったところからも私はどちらかといえば弘法大師に技術者的なイメージを持ってしまいうんですけども、そのときに、それを受け入れた矢原正久の、直系のご子孫の方に教えを受けたということが非常に喜びでありますし、すごくいい経験をさせていただいたなと思います。実際、その矢原先生という方が矢原家の直系の末裔だということを聞いたのは、善通寺市に就職してしばらくしてからのことで、驚きましたけれども、その先生もお亡くなりになって、今もう思い出になってしまっています。

今日、この善通寺周辺の発掘調査についていろんなものを紹介しましたが、まだ発見されていないものとか、わかっていないものも多いです。これからそういった発掘調査が続いて、これまでにわかっていたことが補強されたり、また違う事実がわかったりして、この辺りの古代の文化が解明されていくことを心から期待しています。私自身はこういった仕事に携わらせていただいたうえに、これだけすばらしい人たちと出会えて、またいろんな文化財と出会えたことを非常に心から感謝しております。この感謝を込めて、今日のお話はこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。

*** 質疑応答 ***

【Q1】お話を伺っていたら、古墳が造られたのが弘法大師の生まれる 100 年ほど前ですけど、その頃の、古墳を造っていた頃の記録とかはないのでしょうか？

【A1】はい。古墳時代にはすでに文字は入っていて、豪族の一部の人が断片的な文字を土器とかに残したりしていますが、その頃のことを書き残しているような史料はありません。ですから、いまだにあるのが、天皇陵クラス古墳でもどの古墳が誰の古墳かわからないことがあります。文字による記録というのはほとんど国内にはないです。

【Q2】古墳のあるところに善通寺の大池があるんですけど、善通寺の大池というのはいつ頃から造られたものなんでしょうか？

【A2】はい。さっき鎌倉時代の善通寺の寺領図を見ていただいたとき、大池（有岡大池）の絵が登場していました。その頃にはまあまあ大きさの池があるようですが、それ以前についてはどの程度の池があったのかということとはちょっとわからないと思います。ただ、古代から残っていた可能性のある池が、王墓山と菊塚との間の谷の上流にあります。大池があります。ですから、ある程度その当時から小さな池はあったかもしれません。あとは農業用の溜池史とかを見たら詳しく出てくるかもしれないですが、実際にそういった

時代からそういうのがあったかどうかまでは、申し訳ありません、ちょっと私は見ていません。ただ鎌倉時代の絵図を見ると、結構大きな池が既に出てきています。

【Q3】讃岐忌部と佐伯氏の関係というのは、どういった関係なんですか？ 非常に質問が漠然としていますが。

【A3】ちょっと私、そのあたりの説明ができかねます。ただ佐伯氏だけにしても、佐伯を名乗っているのは国内に結構いますし、讃岐の佐伯氏がいったいどのような系譜なのかというのもちょっとよくわからないところがまだあります。一つヒントになるんじゃないかと思われるのが、王墓山古墳と菊塚古墳は明らかに佐伯氏の墓だと思われるんですが、実は九州系の石室の形を採っています。ですからその辺は何らかのヒントになるんじゃないかなと思っていろんな資料を見ているんですが、まだ今のところ、ちょっとよくわかりません。

【Q4】善通寺市の古墳のなかには、朝鮮半島式の古墳もあるって聞いたことがあるんですけど、それは間違いでしょうか？

【A4】朝鮮系の須恵器が出ていることはありますが、古墳として朝鮮系の古墳というふうに定義されているものはないんじゃないかと思います。ただ、さっきの遺物を見ていただいたらおわかりかと思うんですが、副葬品などについては朝鮮半島と共通したものはたくさん出てきます。それから石室についても、例えば王墓山古墳なんか石室の上の構図はわかっていません。壊れてしまっていて。あそこを復元するとき、そういう副葬品から見て、「もっと朝鮮風の高い石室にしたらどうか」という話も出たんですが、そうすると墳丘のほうがもたないのも無理だということになって、その辺はいろんな研究者のご意見もお伺いしながら古墳の整備を行いました。ちょっと根拠とするものが乏しくて、実際に朝鮮風に復元されることはありませんでした。ですから、古墳そのものとして朝鮮式のものというのはちょっと私も記憶にありません。

【Q5】地震が起こったということなんですけど、今、南海地震が起こったら6弱ぐらいが起こるだろうと、善通寺の大池も決壊してここら辺りは浸水するだろうと言われておりますけど、その当時の地震は、震度に直してどれくらいの震度になってくるのでしょうか？

【A5】古墳の崩壊の状況は把握できていますが、どの程度の震度によってそれが起きるかというところまで、地震の専門家のご意見を集約するところまでは至っていません。ほかの地域の古墳と比べて例えば「阪神淡路級」、「東日本震災級」というぐらいの言い方しかできないんですが、正しい震度としてはちょっと今は古墳の崩壊の状況からだけ、考古学の世界からだけでは押さえることはできませんので、その辺は地震専門の工学系の方にまたご協力をいただかなくてははいけないと思います。ですから今のところ、そういった地震の痕跡としてはつかんでいるんですけども、まだ地震の専門の先生方とのやり取りができていませんので、それは今後の課題かなと思っています。

【Q6】徳島県の大麻山の付近にある萩原墳墓と、野田院古墳は何か関連があるのでしょうか？

【A6】積み石の、ですよ。やっぱり直接結びつけるのは難しいです。造られている場所とか形とかが違います。香川県のものは安山岩ばかりで、高い山の尾根の先端部に造られているものが多いんですが、徳島

県のもは平地に造られているものと、確か山にあってもそれほど高くなかったですよね。積み石としての構造は同じようなものがあるんですが、形も違いますし、実は数がすごく少ないですから、それを完全に比較するところまでいっていないと思います。ですから直接、阿波の積み石を讃岐の積み石と全く同じ集団かどうかというのは難しいと思います。積み石の墓を造るという考え方としては共通していると言えますが、細かい点では違うところが結構あると思うので、その辺はちょっとまだ今後の研究者のいろんな分析を待たないといけないと思います。

【Q7】条里制のことについて聞きたいんですが。仲村廃寺のほうがいわゆる完全に北を向いていたということですが、今の普通寺市は30度ぐらいずれていますよね。そういった場合、いつぐらいから条里制というのは造られたのかってというのがちょっとわからなかったの。廃寺になった後で条里制になったのか。しかも何故、東西南北をきちんとする条里にしなかったのかということなんですよ。平城京とか平安京は全部東西南北がきちんとしていますけど、そこ、わざと斜めにしたのはなぜかっていうところですよ。

【A7】条里制って全国でほぼ同時にやられていますけども、やはりそれは国が土地を管理するために生まれた制度であって、それ以前の、例えばこの辺りだと東西方位に向いたりしているのはもともと古墳時代ぐらいからあるんですけども、それは各地によっていろんな差があると思います。条里制って日本全国で共通して発生するんですけども、それぞれの地域によってその方位を向いてくるところに時間差がありますし、その辺の発生の起源というところまではちょっと難しいと思います。私も今回よくわからなくなってきたのは、なぜ同じ古墳時代の竪穴住居の遺構なのに同じ地域でも一部では東西方位、一部では条里方位に変わってきているのかと。ただ、ひょっとすると条里方位に変わってきている所っていうのが一応、新しいいろんな政策やものを反映している地域なのかなと。ちょっとその辺は難しいです。条里についてはいまだにわからないことも多いですし、これからの調査にまた任せたいと思います。ただ、今回の生野本町遺跡とか四国学院大学遺跡の中の古墳自体の方位が変わってきている部分っていうのは、そういった条里制の施行とか、そのあたりの過渡期を考えるうえでは大事な資料にはなると思います。ですから今後、類例の発見を待ちたいと思います。

【Q8】四国学院大学遺跡の中で溝が二カ所あって、道がついていたってお話なんですけど、これは「南海道」という道なんですか？　なんか南海道はずっと向こう、多度津寄りだと聞いていたんですけど、これも南海道とかいうのに当たるんですかね？

【A9】まず「南海道」というのはおっしゃるとおり、今の国道11号の近くを抜けていたらしいと。それで県が調査した中でも、駅に関係するんじゃないかと思われるような巨大な掘立柱の跡とかが出てきたりしています。ただ、道の遺構自体はまだ見つかっていません。それから道というのは南海道にしても歴史上の長い間一カ所にずっとあったのか、それとも何回かつけ替えられているのかということもありますし、巨大な国の官道である南海道に対してやっぱり地方道みたいなものもあったと思います。なかなか道を見つけるのは難しいので、最近見つかってきている道というのが今後のいろんなことを考えていく資料になるかと思います。それで、最近もう一つ道が見つかっています。普通寺市が老人ホームの建て増しをしたときに見つかったもので、仙遊町にあります。実はあそこで道が出てきているんですが、それこそ南海道が通っていると思

われるずっと北のほうから、総本山善通寺のほうに向いて真っすぐ延びている道なんです。それもごく一部の断片的な道。ですから、それは条里方位とは外れてついている道なので、ちょっと不思議なんですけどもそういった道も見つかったりしています。平野部で行われる発掘調査でも道の確認というのは少ないんですけども、当時の道で面白いのが、もしそれが本当の道かどうか調査しようとするとその延長線上を何か所か調査していったら、同じような遺構が見つければそれが当時の道だというのが補強されていきます。たとえば、四国学院大学構内遺跡で見つかったものも道らしいということで、今、市役所の新庁舎の調査のほうでもその延長線らしいものをつかんでいます。拡張調査もこれからしていきますので、そういったところで補強されていくんじゃないかと思います。ただ、道の幅からすると四国学院大学構内遺跡で見つかったのは南海道というよりは、それ以外の道ではないかと思います。道というのはやはり今申しましたように、ひょっとすると時期によってある程度場所を変えている可能性もあるんじゃないかと思います。